書　評

信原克哉（信原病院長）著
「肩—その機能と臨床—」

福岡大学整形外科教授　高岸直人

今度医学書院より私の最も敬愛する整形外科医の一人である信原先生が「肩—その機能と臨床」と題してB版298頁の本を出版された．

日本で初めての肩の本であるし，先生の10年余の肩の研究の集大成である．内容も豊富で，印刷も鮮明であるし，多数の先生自筆によるschemaを含めて写真を取り入れ，読者の理解を深めると共に，カラー写真迄取り入れて，手術者の立体感，色の感覚からの理解を得さしめるよう配慮されている．肩入門書として恰好の専門書というだけでなく，専門家にも必読の書として推奨に値する．

先生の肩における考え方はユニークで，特にその機能に対する考え方は抜群で，日本だけでなく，私の知る限りでは外国においても屈指の卓見の持ち主である．その卓越した機能に対する考え方を基礎として多くの先生独特の治療法を開発して来ており，そのすべてがこの本に書かれている．Codman, Bateman, Saha, Soplaier等のこの道の先駆者の意見を多くとり入れ，後2者に対する業績をいち早く日本に紹介したに留まらず，これらの考え方を実際の治療法の上に応用して行っている．日本における肩の先駆者の一人がこのような立派な本を書かれて日本の肩のレベルを上げてもらえることは，私一人だけでなく多くのこの方面に関心を持っている人々の喜びでもあろう．盛業を続けられている開業医として業務の余暇を利用しての本であるだけに，常に患者を中心として，自分の経験を主体として書かれている点が多く，単にいわゆる机上の論文の引きうつしでない所に本書のもう一つの特色がある．

第3の特色は，その内容のくだけた所であろう．目次をめくっても，「肩のつくり」，「肩の仕組み」，「肩の診察」などむしろ整形外科医や外科医でないものまで読者の中に包含してしまおうという意図のもとに書かれたのではないかと思われる所まで見られる．項目ごとにその語原や由来を記しているのも珍しい．たとえば，鎖骨 Clavicle：英語ではCollar bone（襟の骨）と呼ばれているが，わが国では大槻玄澤がオランダ語から訳した鎖骨をそのまま用いている．前者はその部位からつけられた名称であるが，後者はモルモット，コウモリなどに見られる原始的な形，また家兎では部分的に骨に似た組織があって，上肢の運動に際して伸びちぢみするチェーンのように作用することから来たいわば発生学上の変化を表わしている語である……と言ったように．

いろいろな肩の形・動作などを私達の通俗な動作や自然現象になぞらえた表現も面白い．

しかし何と言っても本書の最大の特色は先生の開発された手術法の紹介であろう．肩関節拘縮の項目の中に書かれているが，その病態については勿論であるが，症例をあげての第2関節形成術，臼蓋骨切り術（glenoid oseotomy）およびSahaの考え方に従って術後の固定肢位を0-positionとして術後のRehabilitationを早くしかも容易にしようとの試みなどは必読の部分である．また臼蓋骨切り術をdore shoulderにも応用してその理論的根拠と共に自験例の成功例を収載しておられる．

肩の入門書としてだけでなく専門書としても立派な本であるので，関心を持たれている医師の一読をおすすめしたい．

（B5　頁298　図128　写真149　原色図39　¥12,000　〒300　1979）

医学書院刊

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/09/25 12:06:05